幼児教育における集団での絵本の読み聞かせ

Storytelling for Groups in Preschool Education

髙 橋 順 子*　　首 藤 敏 元**
Junko TAKAHASHI　　Toshimoto SHUTO

キーワード：幼児教育，集団，読み聞かせ，共感，協同の態度

1 はじめに

絵本を読み聞かせること（以下「読み聞かせ」）は、幼児の心の教育に良いと考えられ、家庭、地域、幼稚園や保育所などで盛んに様々な試みがなされている。子どもが親に絵本を読んでもらうことは、読み手と聴き手が“共に居る”ことであり、親の膝に座って、顔を寄せ合いながら、読み手の声で物語が語られ、一緒に挿絵を見ることは、子どもにとっては何ものにも変えられぬ至福のときである（松居，2002）。

読書は、本来個人的営みである。読み聞かせも、読み手と子どもで楽しむ個人的な性質をもつといえるであろう。しかし、小学校以降の教育においても、就学前の集団教育においても、集団の読書は大切な意義をもち、盛んに実践されている。ここで、ある一人の幼児が読み聞かせを体験する機会について考えてみる。その幼児は、幼稚園や保育所において学級全体で保育者に絵本を読んでもらい、降園後や休日に地域の児童館や図書館で読み聞かせの会に参加し、就寝前に寝床で親に読み聞かせてもらうなど、幼児一人の生活の中に様々な読み聞かせの機会があるといえる。

これらの読み聞かせの違いは、何か。松居（2002）は、「絵本の語りをみんなで聴くとき、幼稚園や保育所や学校、それに図書館や家庭文庫でも、“共に居る”歓びには変わりありません。先生の声で語られる絵本を友だちみんなで一緒に聴く楽しみは、絵本を一対一で読んでもらう楽しみとは違った歓びです。『おおきなかぶ』の場合など、「うんとこしょ！どっこいしょ！」とみんなで掛け声をかけたりすれば最高です。思わぬ場面で友だちが溜息をついたり、悲鳴をあげたり、怖がったり、手をたたいて喜んだりするのを見るのがおもしろく、イメージが拡がり実感が湧きます。また互いに共感できることほど嬉しいことはありません。こうした経験をとおして、子どもたちの気持はいきいきとなり、感性はゆたかに育ちます。これは教えようとしても教えられぬ感情体験であり、あえて言えば命の教育です。“共に居る”歓びを身体一杯に体験した子どもは、他人の命を平然と奪うような人間にならないでしょう。歓びこそが命であり、生きる力です」(p.45)と、幼稚園や保育所でしかできない読み聞かせの意義を語っている。これに加え、幼

*　埼玉大学大学院教育学研究科
**　埼玉大学教育学部幼児教育講座

稚園や保育所においては幼児教育の専門性を生かし、集団での読み聞かせを意図的・計画的に実践し、その成果を絶えず評価することが必要であると考える。そこで、これらを踏まえ、具体的な実践方法ついて考えてみたい。

2　幼児教育における集団での読み聞かせの実践のポイント

集団での読み聞かせのメリットと幼稚園や保育園の保育の専門性を生かし、次の3点を実践方法のポイントと考えた。

2－1　共感し、協同の態度の芽生えを培う

幼児教育における集団での読み聞かせは“共に居る”歓びである（松居，2002)。これに加え、協同の態度の芽生えを培うことになると考えた。

小学校以降の学校教育においての集団での読書は、話し合いを通して仲間の感じたり考えたりしたりしたことを聞く中で、その感じ方、考え方に同化したり、共感したり、修正したりしながら自らの考えを深めていき、自らの考えを確かなものにしていくことができるということがいわれている。社会科の初志をつらぬく会（1967）は、「重松氏が試案した評価の視点、1　経験や知識の拡大、2　尺度の展開、3　共同思考への参加態度の変化、4　事態への肉迫性、5　道徳的実践性」を取り入れ、評価の対象が単なる知識の理解でなく、道徳的価値的側面も含みこんだ人間全体の成長と考え、共同思考の変化を評価の視点にいれると述べている。ここでの共同思考とは、学級集団において、子どもたちが互いに自分の問題を集団に出しあい、そこで、互いにその問題についての考えをつき合わせることをさしている。

就学前教育では、共同思考と重なる内容が、幼稚園教育指導要領の幼稚園教育の目標（2）に「人への愛情や信頼感を育て、自立と協同の態度及び道徳性の芽生えを培うようにすること」と示してあり、さらに解説によれば「生活の中で様々な人と触れ合い、互いの感情や意志を表現したり、共感したりすることを通して培われるものである」(p.46)と述べられている。

これらのことから、幼児教育における集団での読み聞かせは、協同の態度の芽生えを培い、やがては、共同思考への参加態度の変化へとつながると考えた。保育者は協同の態度の芽生え、小学校教育の連携を意識して、読み聞かせる絵本を選択し、さらに表現や協同の態度へとつながるような働きかけが大切である。

2－2　幼児の興味や関心を広げる

幼稚園教育指導要領解説　第2章　ねらい及び内容　4（9）「絵本や物語などに、親しみ、興味をもって聞き、想像する楽しさを味わう」では、「家庭ではどちらかというと自分の興味のあること中心に見たり、読んだりすることになるが、幼稚園では教師や友達の興味や関心にもふれるようになっていく」(p.117)とある。保護者からの話や家庭で読んだ絵本を記入する絵本カードなどから、家庭では幼児の興味や関心または親の好みによって、読まれる絵本の内容が偏る傾向もあると思われる。したがって、幼稚園や保育所では、絵本の領域を広げる工夫も必要である。

2—3　発達の道筋を見通し、意図的・計画的に行なう

幼稚園教育指導要領解説　第１章　総説　３　計画的な環境の構成には「一人一人の幼児のかかわっている活動の各々の展開を見通すとともに、入園から修了までの幼稚園生活、修了後の生活という長期的な視点に立って幼児一人一人の発達の道筋を見通して現在の活動の位置づけ、幼児の経験の深まりを見通すことが大切である」(p.35) 保育所保育指針には第4章、6ヶ月から1歳３ヶ月未満の保育の内容　ねらい　（８）「絵本や玩具、身近な生活用具が用意された中で、身の回りのものに対する興味や好奇心が芽生える」(p.34)など年齢ごとに「絵本・物語」に関する事柄が述べられている。実際に家庭では、幼児が選んだ本を読んだり、年齢の異なったきょうだいと一緒に読み聞かせをしたりすることは多いと思われる。したがって、幼稚園や保育所においては幼児教育の専門性を生かし、発達の道筋を見通した読み聞かせを意図的・計画的に行ことが望ましい。

３　実践方法

２で述べた3点をもとに、事例や試案を示してみた。

3—1　共感し、協同の態度の芽生えを培う保育の展開の事例

対象：5歳児　　絵本：『スイミー』レオ・レオニ作、谷川俊太郎訳、好学社　1969年

表１　保育の展開

時期	保育者の意図・援助	幼児の姿	集団での読み聞かせの効果
7月	・夏になりプールに入ったり海に行ったりする季節なので幼児（適者）の生活と結びやすく興味がもちやすいと考え（適時）、学級全体で『スイミー』(適書)を取り上げ、読み聞かせる。(留意点は資料１　参照)	・読み聞かせてもらうことより、話や挿絵を楽しむ。 ・自分なりに興味をもち、好きな遊びのときに、繰り返しみたり、家庭に絵本を借りていったりしている。	・保育者に読み聞きかせてもらっているときは、友達と共感している。 ・自分なりに興味をもつ。 ・絵本を借りたことで、幼稚園と家庭との共通の話題ができる。
11月	・近隣の小学校の学芸会を見て、小学生に親しみをもち、小学生のしていることを刺激として、遊びに生かしてほしい。	・自分たちがよく知っている話なので、親しみをもって、3年生の劇『スイミー』を興味深く見ている。	・大好きな話『スイミー』がいろいろな方法で表現できることを知る。
12月	・近隣の公立図書館にて、ブラックシアターを見に行く機会があり行った。内容は『スイミー』であった。	・３年生との劇の表現方法の違いに気付き、友達と伝えあっている。	・同じ話でも、劇の他にもブラックシアターという表現方法があることを知る。
1月	・生活発表会（学芸会のような行事）があることを幼児に伝え、どのようなことを表現したいか聞く。	・自分なりに課題と受け止め、取り上げたい話を友達と出し合う。	・幼児期なりの共同思考への参加と考える。

2月	・幼児が表現したいことが実現できるように援助する。 ・家庭との連携を図り、幼児の成長の姿を知らせる。（資料 2 学級通信参照）	・自分のなりたい役になり表現する。 ・友達と協力して、劇を進行する。	・協同の態度の芽生えと考える。 ・保護者も幼児の姿から、幼児の感じていることや考えていることに共感する。

＜事例１のまとめ＞

『スイミー』は多くの人に愛され、親しまれてきた作品（適書）である。保育者が季節（適時）から、取り上げた絵本が、小学3年生、地域の人、家庭とみんなで共有するものであった。共有しやすいために、幼児が安心して話を受け止め、さらに、自分たちへの表現へと展開できたと考えた。自分たちの表現になるまでは、自分たちの課題と受け止め、協同の態度の芽生えが見られた。幼児期は生涯読書への本格的な出発点である。幼児（適者）が様々な人と共感し合えるように、保育者は適時・適書を選択することが大切な役割である。

３―２　幼児の興味や関心を広げる事例

野村（2004）は、「ブックトーク」という方法で、絵本の領域を広げていくのも一つであると述べている。幼児教育は総合的に行うことから、絵本の領域を広げていくことは幼児の活動の幅を広げることにつながると考える。

ブックトークとは、あるテーマに沿って、数冊のいろいろな種類の本を順序よく紹介していくことである。幼児に向けてのブックトークは、園生活や今までの絵本とのかかわりなど幼児の実態を重視して行なう。よくみえる絵や写真の魅力的なものを選び、幼児の集中できる時間（20分位までの目安）内で行なう。

＜ブックトークの手順＞

１　テーマを決める→２　本を集め、紹介する本を選ぶ→３　ブックトークの流れを考えてシナリオを書く→４　紹介するページや読み聞かせるところを決めて細案を立てる。

試案（対象：5歳児　時期：5月　テーマ：「あおむし」（表２）

＜事例２のまとめ＞

幼児教育は、遊びを通して総合的な指導であることが基本である。ひとつのテーマをもち進めるブックトークは、ストーリーの違いを楽しんだり、他の国の言語を知ったり、生物そのものの生態に興味をもったりと様々な方向に展開できる。さらに、その展開学級でテーマを共有しながらも、幼児一人一人の興味や関心を大切にできる。このようなことから、ブックトークは幼児教育に、大変効果が出る指導方法のひとつである。

動植物、行事、季節など幼児の身近なテーマを選び、ブックトークを行い、幼児の生活の幅を広げる援助をしていきたい。

３―３　発達の道筋を見通し、意図的・計画的に行なう事例

表２　試案（対象：5歳児　時期：5月　テーマ：「あおむし」

紹介する本	幼児の生活とつなげるポイント
『クレリア』 マイケル・グレイニエツ　絵と文 ほその　あやこ　訳　　セーラー出版 『はらぺこあおむし』 縦22ｃｍ・横31ｃｍの原典のサイズ 縦42ｃｍ・横58ｃｍの大型絵本 エリック・カール　絵と文 もり　ひさし　訳　　偕成社 『The very Hungry Caterpillar』 Eric Carle　　Hamish Hamilton 『アゲハチョウ』 カラー自然シリーズ２８　　偕成社	・園庭にいた青虫のことを思い出させる。 ・「クレリア」が、消えてたのは、なぜかという謎を残して、青虫を見つけたとき、話題にする。 ・飼育している青虫が、毎日、葉をたべて、糞をしている様子とつなげる。 ・幼虫がさなぎになったとき、イメージを広げ、楽しみに成虫になることを待つ。 ・同じ絵本でもサイズの違いで楽しむ。 ・『はらぺこあおむし』の英語版であり、世界中で沢山の子どもが、共通に読んでいることを知らせる。 ・外国籍の子どもも在籍していることもあり、日本語以外の絵本にも興味をもてるようにする。 ・飼育している青虫とつなげる。

長期的に意図的・計画的に読み聞かせを行なうには、保育者が読み聞かせリストを作ることが有効であると考えた。幼児の3年間の発達を見通し、読み聞かせリスト（試案）の作成をした。なお、取り上げる理由は、幼児の発達の姿、行事、遊びの様子、遊びの展開の可能性を目安とした。

表３-1　読み聞かせリスト（試案）（3歳児）

3歳児				
月	取り上げる理由	絵本の題名	著者　画家　訳者	発行所
4	親子の世代間で読み継がれる代表作。家庭でも親しんでいる絵本を読むことで早く園で安心して過ごしてほしい。	ぐりとぐら	なかがわ　りえこ・作 おおむら　ゆりこ・絵	福音館書店
5	園生活にも慣れ、擬声語や擬態語を口ずさむなど友達と“共に居る”歓びのスタートとなる。	もこ　もこもこ	谷川　俊太郎・作 元永　定正・絵	文研出版
6	いろいろな模様に変わるワンピース。ゆっくり絵を見ることを楽しみたい。	わたしのワンピース	にしまき　かやこ・作・絵	こぐま社
7・8	プール遊びなどで着替える機会が多くなり、自分でしてみようという意欲を高める。	はけたよはけたよ	かんざわ　としこ・作 にしまき　かやこ・絵	偕成社
9	お月見に興味をもってほしい。	おつきさまこんばんは	林　明子・作・絵	福音館書店
10	はじめての芋ほり遠足に期待をもたせる。	おおきなおおきなおいも	赤羽　末吉・作	福音館書店

11	学級で集まる楽しさがわかる頃、友達と声をあわせて「うんとこしょ、どっこいしょ」友達といる心地よさを味わってほしい。劇遊びにも展開できる。	おおきなかぶ	内田　莉莎子・再話 佐藤　忠良・絵	福音館書店
12	なじみのある『ぐりとぐら』シリーズのひとつで、クリスマスという季節を楽しんでほしい。	ぐりとぐらのおきゃくさま	なかがわ　りえこ・作 おおむら　ゆりこ・絵	福音館書店
1	「いれて」「いいよ」などのやり取りは幼児の日常の生活によくあること。劇遊びにも展開できる。	てぶくろ	ウクライナ民話 ラチョフ・絵 内田　莉莎子・訳	福音館書店
2	雪で遊ぶ楽しさのイメージを広げてほしい。直接体験と間接体験の往復を楽しんでほしい。	ゆきのひ	エズラ・ジャック・キーツ・作・絵 きじま　はじめ訳	偕成社
3	幼児が通っている園と絵本の幼稚園を重ねて、いろいろな幼稚園を想像し楽しんでほしい。	ぐるんぱのようちえん	西内　みなみ・作 堀内　誠一・絵	福音館書店

表３-2　読み聞かせリスト（試案）（４歳児）

４歳児				
月	取り上げる理由	絵本の題名	著者　画家　訳者	発行所
4	園内のビオトープや遠足で、おたまじゃくしを観察する体験と重ねて話を楽しんでほしい。	おたまじゃくしの１０１ちゃん	かこ　さとし・作・絵	偕成社
5	こいのぼりにちなんで取り上げる。こいのぼり製作と結びつけてほしい。挿絵から、いろいろなこいのぼりを楽しめる。	そらまでとんでけ	寺村　輝夫・文 いもと　ようこ・絵	あかね書房
6	砂遊びが盛んな季節。「せんたくかあちゃん」という題名とかみなりのいろいろな顔が楽しい。	せんたくかあちゃん	さとう　わきこ・作・絵	福音館書店
7・8	絵本のように体操したり、泳いだりするまねをするなど楽しんで、プールに喜んで入れるようにしたい。	ぐりとぐらのかいすいよく	なかがわ　りえこ・作 やまわき　ゆりこ・絵	福音館書店
9	10 月に行なわれる運動会に向けて、期待をもち取り組んでほしい	とんぼのうんどうかい	かこ　さとし・作・絵	偕成社
10	散歩で拾ったどんぐりと話を結びつけ、想像が広がる。	どうぞのいす	香山　美子・作 柿本　幸造・絵	ひさかたチャイルド社
11	繰り返す読む絵本の１冊。 おおかみとこやぎたちのやりとりを楽しんでいる。おおかみを追い手、こやぎを逃げ手として、鬼遊びへも展開できる。	おおかみと七ひきのこやぎ	グリム兄弟原作 フェリクス・ホフマン・絵 瀬田　貞二・訳	福音館書店
12	クリスマスという季節を楽しんでほ	まどからおくりもの	五味　太郎・作・絵	偕成社

	しい。また、穴あき絵本であることから、絵本の構造に興味をもつと、後に製作物に工夫を加える力となる。			
1	繰り返す読む絵本の1冊。 劇遊びとして発展できる。やぎによって違う3つの擬音やトロルのしわがれ声などに想像を広げる幼児の感性を大切にしたい。	三びきのやぎのがらがらどん	北欧民話 マーシャ・ブラウン・絵 瀬田　貞二・訳	福音館書店
2	園行事で行なう豆まきと共に楽しんでほしい。	おにはうちふくはそと	西本　鶏介・作 村上　豊・絵	ひさかたチャイルド社
3	最高学年になることに期待をもってほしい。	おおきくなるっていうことは	なかがわ　ひろたか・作 村上　康成・絵	童心社

表3-3　読み聞かせリスト（試案）（5歳児）

5歳児				
月	取り上げる理由	絵本の題名	著者　画家　訳者	発行所
4	表紙が地味であるが空想の世界に入り込める絵本である。どのページをめくっても、幼児の遊びと共通点があると考える。	もりのなか	マリー・ホール・エッツ・作・絵 まさき　るりこ・訳	福音館書店
5	絵の具を使ってのびのびと絵を描き始める時期。いろいろな生き物の登場と挿絵の色彩が魅力的。	まほうのえのぐ	林　明子・作・絵	福音館書店
6	歯の衛生週間にちなみ取り上げる。科学的芽生えを大切にしたい。「歯」をテーマにブックトークもできる。	はははのはなし	加古　里子・作・絵	福音館書店
7・8	夏、キャンプにでかける幼児も多いと思う。小さくて負けず嫌いの主人公に共感する幼児も多いと考える。	はじめてのキャンプ	林　明子・作・絵	福音館書店
9	表紙・挿絵ともに迫力がある。9月に入り、バッタを捕まえる経験と重ねてほしい。	とべバッタ	田島　征三・作・絵	偕成社
10	遠足に期待をもってほしい。秋の空の雲の動き、夕焼けなどに興味をもってほしい。	あしたてんきになあれ	荒川　薫・作 長　新太・絵	福音館書店
11	乳歯から永久歯にはえかわる幼児が増える。世界中の子どもがはえかわる体験していることを共有できる。	はがぬけたらどうするの？	セルビー・ビーラー・作 ブライアン・カラス・絵 こだま　ともこ・訳	フレーベル館
12	クリスマスの本は多い。幼児と一緒に他にも探してみたい。	ちいさなちいさなサンタクロース	フィリップ・コランタン作・絵 のむら　まりこ・訳	佑学社
1	実際に体験したお正月との違いと共	おしょうがつ	松野　正子・作	教育画劇

	通点。正月遊びへと展開できる。料理や着物の柄など挿絵の細かさが魅力的なのでじっくり見てほしい。		ましま　せつこ・絵	
2	本格的な昔話を楽しむ経験をしてほしい。青鬼と赤鬼の気持ちを幼児はどのように感じるのだろうか。	ないたあかおに（ひろすけ絵本）	はまだ　ひろすけ・作 いけだ　たつお・絵	偕成社
3	竹の子の季節である。話の展開をじっくり楽しんでほしい。挿絵の方向が変わるところもダイナミックさを楽しんでほしい。	ふしぎなたけのこ	松野　正子・文 瀬川　康男・絵	福音館書店

＜事例３のまとめ＞

以上の読み聞かせリスト（試案）は、いままでの筆者の保育実践をもとに作成した。幼児の実態に合わせて、計画を変更することもある。幼児の発達、興味や関心にあっていたかなど常に反省・評価して繰り返し書き変えていくことも必要である。

斎藤（2003）は講話で、自分の心の中にまず、100冊の基本図書館をつくり、自分が次世代に伝えたいのか具体的に示すことを薦めている。保育者も読み聞かせリストあるいは心の中の図書館100冊を作ることで、より質の高い保育になるのではないかと考える。

４　考察と今後の課題

本来個人的な営みである読書が、幼児教育における集団の活動として、なぜ大切なのかが明確になりつつある。幼稚園や保育所などの幼児教育における集団での読み聞かせは、絵本の楽しさを友達と一緒に味わい、友達が感じたことを刺激として受けて楽しむ。いろいろな感じ方を知り、友達と共感し、共通のイメージをもたせ、次の遊びや生活を豊かなものとしていく。

この体験がもとになり、幼児は自分自身の体験や知識、考え方を広げ、さらに、家庭、幼稚園や保育所にととどまらず、地域、世界の人々と共感できることにつなげることができる。したがって、保育者は、読み聞かせの本質を大切にしながらも、集団での読み聞かせについて、よりよい環境の構成を行なうように努めたいものである。

今後は、絵本の教材研究を深め、「適者・適時・適書」の基本原則を基に実践し、常に質の高い保育へと展開するようにしていきたい。それには、幼児一人一人の育ちの評価のみでなく、集団での読み聞かせの評価の観点を明確にして自分自身の指導への評価を厳しくしていきたい。

＜引用文献＞

厚生省児童家庭局（現　厚生労働省）　1999 保育所保育指針 チャイルド本社

斎藤　惇夫　2001　子どもたちが求めているもの―子どもたちの成長と物語―キッズメイト

斎藤　惇夫　2003　本を生涯の友とする子どもを育てるために　2003年11月　千代田区立九段幼稚園にて講演

社会科の初志をつらぬく会　1967　評価を生かす社会科指導　　明治図書

野村　昇司　2004　子育てに絵本の読み聞かせを　　銀河社
松居　直　2002　NHK人間講座2002　12月～2003　1月期　絵本のよろこび　　日本放送協会
文部省（現　文部科学省）　1998 幼稚園教育要領解説 フレーベル館

＜参考文献＞

AERA　2003　No.43　幸せの絵本　あの人が選ぶ、次世代に残したい100冊　朝日新聞社
学校図書館の活用実践事例集１，２　2004 学校図書館活性化研究会　　第一法規
研究紀要　幼児期における生きる力の育成　2000　北区教育委員会・北区教育会・北区立幼稚園教育研究会
子どもが主役の生活　プラン・アイディアの資料　1997　　富山大学教育学部附属幼稚園
Gakken

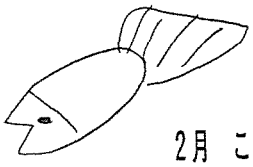
謝辞

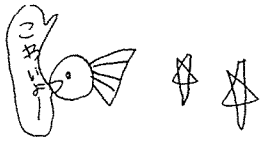
本文をまとめるにあたり、貴重な文献、資料などを多く提示してくださりご助言いただきました埼玉大学非常勤講師保岡孝之先生に、深く感謝いたします。

資料１　集団での読み聞かせの読み手の留意点

○ 幼児は「絵を読んでいる」という意識をもって読む。
○ 絵本をしっかりと開き、揺れないように持つ。
○ 絵を隠したり、途切れさせたりしないように持つ。
○ 文章の短いところは意識的にゆっくり読む。
○ 劇的に読まない。劇的に読みすぎると感じることを阻害してしまうことがある。その人がもっている声の良さを生かすことが大切である。
○ 読み聞かせしているとき、質問が出たら簡単に答える。何でも分からせようとするのではなくお話の世界にいることを大切にし、絵と話から感じ取り、イメージの世界を広げていかれるようにする。
○ ページを手でめくるという動きは、場面展開と語りリズムの上で重要な意味をもつ。この効果を充分に考えて、ページをめくりながらよむ。
○ 絵本によって紙から順番に最後までめくり、裏表紙まで見せて終わりにする場合と、表紙と裏表紙とを広げて見せるようにする場合がある。絵本にはそれぞれことなった趣向が凝らされているので、読み手は、事前にその絵本の仕組みや特色、画家の表現意図を見届けてから、声に出して読む。

資料２　学級通信





2月 こうまぐみだより＜生活なかよし発表会特集＞

平成１２年２月４日（金）
担任　　高橋　順子

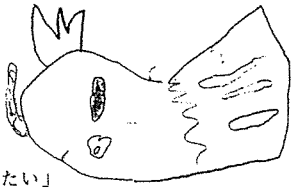
題材「スイミー」を選んだことから、

こうま組の成長ぶり

昨年、豊島東小学校の学芸会で３年生が演じた「スイミー」を鑑賞し、先日、三園交流でブラックシアター「スイミー」を見ました。これらの小学生や地域の方々との交流で経験したことを刺激として、自分達の生活に生かしています。

生活なかよし発表会の題材を決める時、話の創作を楽しんだり、誕生会で教師劇を見せたりしたのですが、全員一致で「スイミー」になりました。この選択した姿からこうま組の皆が、友達と協力することと勇気をもつことの大切さに共感できる心が育ち大きく成長したのであるととらえています。

また、表現方法もペープサート、ブラックシアター、劇とさまざまです。特に、ペープサートやブラックシアターについては、見る側と演じる側とで見えている場面が違うので劇にくらべて難しいです。このような表現がしたいという気持ちを大切にすると共に知的にも発達した年長児としての姿をご覧いただけると思います。練習の時、「頭が見えちゃう」「もっと、隠れよう」などと気がつく幼児もいたのですが、そのことが気になってのびのびと表現できないと残念なので、一生懸命に取り組んでいる姿のひとつとして見ていただけましたら幸いです。



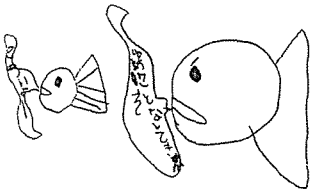
今回の表現で担任として大切にしてきたこと

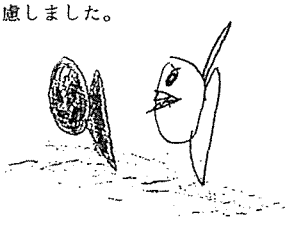
「一人一人、幼児の２年間の成長を発表できるものとなるようにしたい」
例えば……

友達と協力する姿、自分で考えたことをお面や台詞などでのびのびと表す姿、
自信をもって自分の役割を果たそうとしている姿、幼稚園の活動を楽しんでいる姿
……など、いっぱいあります。

この活動で悩んだこと

「スイミーになりたい」とほとんどの幼児がいっていました。表現方法の点から考えて２人以上のスイミー役は難しいと思いました。そこで話を４幕にわけ、スイミー役を４人まで増やしのですが、その他３名ほどなれませんでした。他の役でも上に書いた通り、それぞれの２年間の成長ぶりを発揮できるようにしましたが……。このようなことから、合奏の分担などは、スイミー以外の役の子の希望を優先するなど配慮しました。



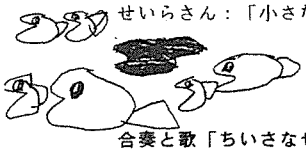


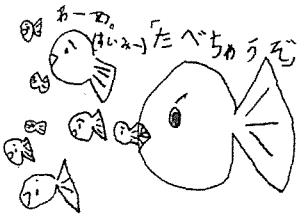
資料２　学級通信（続き）

こうま組のインタビューから

一人一人にどのようなところをお客さんに見てほしいか、聞いてみました。

あずささん：「まぐろにおいかけられるところ」
りささん　：「まぐろが追いかけられるところ」
こずえさん：「『食べられちゃうから出られないよ』というところを頑張るから見てほしい」
せりなさん：「スイミーが速く泳ぐところ」
あさみさん：「小さな魚が“くるっ”っとひっくりかえるところ」
くるみさん：「皆と力を合わせて、大きな魚になるところ」
せいらさん：「小さな魚が食べられるところ」



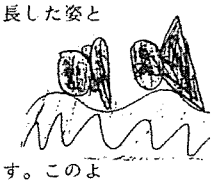


合奏と歌「ちいさなせかい」

１年間、なかよしクラブ時代を入れれば２年間、仲良く遊んだこりす組と一緒に心を合わせて、合奏と歌を歌います。

こうま組は、全員が自分のパートを一人で自信をもって演奏します。友達の音をしっかりと聞いているところや音階のある楽器を楽しんで使うのも、年長としての成長した姿といえます。

アンコール！？……もちろん……。



その他、年長児としての園行事で役割を果たす姿がいっぱい

司会、こりす組の効果音など年長児として園行事を積極的に運営していきます。このような立派な姿も、ご家庭で認めて下さると幸いです。

最後に……

意欲満々なこうま組ですが、当日、緊張して普段の姿が十分に出しきれないこともあるかもしれません。そんな姿も優しく受け止めて、温かい拍手をお願い致します。

……キ　リ　ト　リ……

生活なかよし発表会の感想をお聞かせ下さい。　　こうま組　名前（　　）

資料２　学級通信（続き）

みどころ

表現する順序にしたがって、苦労したところやみどころを紹介いたします。

第一幕　ペープサート「ちいさなさかなおおきなまぐろにたべられる」

小さな赤い魚のくるみさん、あずささん、あさみさん、りささん、せいらさんは、最初のうたにあわせて動かします。みんなで合わせて演じることに努力しました。泳ぎの速いまっくろなスイミーのせりなさんは、元気なスイミーぶりを発揮。

大きなまぐろ役のこずえさんは、堂々とした泳ぎで登場です。小さい魚とのやりとりでは意気をあわせて演じます。年少組からは「本当に食べられるように見せて」との注文もありました。互いに客席から見てアドバイスし合って繰り返し練習しました。

第二幕　ブラックシアター「うみのきれいないきもの」

スイミー役はあずささん。きれいな生き物役はあさみさん、こずえさん、せいらさん、くるみさん、りささん、せりなさん。

三園交流会で見た「きれいなスイミー」を演じたいという思いを実現させました。絵本でもきれいな生き物が描かれていて、何度もページをめくり、一人一人が想像力を働かせてきれいな生き物を描いていました。蛍光絵の具がなかなか届かず、「先生、絵の具屋さんに『速く持ってきてください』って、電話してよ」というほどのブラックシアターに対する熱意がありました。

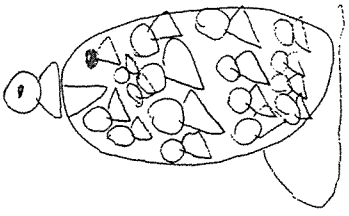
どうぞ、きれいな生き物をブラックシアターの世界でお楽しみください。

第三幕　劇「あたらしいなかまとのであい」

スイミー役はせいらさん。小さい赤い魚役は、あずささん、こずえさん、くるみさん、りささん、せりなさん、あさみさん。

第三幕はまさに、こうま組の日頃の生活が出ているといえます。一人一人が自分なりに考えたことばを自信をもって表現できるように心がけました。「一緒にあそぼう」「みんなで力を合わせよう」など、年長として心が成長してきている点をご覧下さい。

第四幕　大きなペープサート「ちからをあわせて」

この場面では、本当に力を合わせなければ、演じることができません。小さい魚を大きな魚に見えるように作った時も力を合わせ、できあがった作品も補強などのためかなり重くなってしまいました。また、本物みたいにしっぽを動かそうなどと工夫したら、持っていた棒がおれてしまうというアクシデントもありました。スイミー役のこずえさんも、皆と足並みあわせて動くことを工夫しています。

まぐろ役のりささんは、悠々として泳ぐようすを演じます。